

<卒業論文小特集>代作：憶良の挽歌の一特徴

飯島，俊朗

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

35

(開始ページ / Start Page)

84

(終了ページ / End Page)

97

(発行年 / Year)

1986-12-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019475>

代作

——憶良の挽歌の一特徴——

山上憶良、万葉集において長歌を自在に操り、表現の形式、方法にも腐心した彼は、その人生の晩年に多くの歌を作った特異な存在でありました。また官人であったにもかかわらず一つとして宮廷儀礼歌を残しておりません。宮廷儀礼歌を多く作った人麻呂や金村よりも地位が高かったこともありましようが、残されております歌の量と比べて一首もないのは、不自然なようですが、ともかくこのことから官人憶良は、宮廷歌人ではなかったといえ、少なくともそういった意味からは、比較的自由に作歌できる立場だったことがうかがえます。

老歌人憶良は、『老』を憂い、『病』を嘆き、『貧』を恨む歌を作りました。そして老人憶良は、もはや『死』に近いという自覚を持たざるをえなかったようです。そのようなときに彼は、他人になりかわって作ったと思える歌をいくつか残しております。いわば代作でありまして、それらの歌は、憶良にとっては、死んでしまった他人、もしくは、その肉親の立場になって作歌するといういわば挽歌

飯島俊朗

の代作をおこなっているのです。憶良は、単に挽歌の代作に興味があった、好んだ、というよりも死に近いと自覚した者にとっては、もっと身近な、それ以上に必要な『食うべき歌』としてそれらは作られたのではないかと私は、考えるのです。はたして晩年の憶良にとって挽歌の代作ということは、いかなる意義を持つものだったのでしょうか。

憶良の上司であり歌においては、友人的な存在であった大伴旅人、彼が〈天さがる鄙〉任地大宰府において作った亡妻歌

397 世間は 空しきものと 知る時し いよますます 悲しかり
けり

最愛の妻は、死んでしまった。人間は、結局は、死ぬものだということとは、わかっていたつもりだったが、あまりの突然さに今まで頭の中に植え付けようと努力してきた「世の中は空しいものだ」という考えは、体験に打ち砕かれて、知っているつもりだった時よりも「知る時し」……「実際に知った時」の衝撃の強さは、も

はやどうしようもないもので、ただただ悲しいものであると実感したのであります。彼には、「世の中は空しいもの」と意識してみようとしても超えがたい悲しみが湧きあがってきてしまう人間の心の底の心情を歌にしえた、時代を突出した歌人だったと私は、考えます。

妻を失ってしまった旅人の心は、ある種の分子が今まで安定していた共有結合を解かれてしまったかのように彼の精神は、不安定になり、また一面活性化し、何かを求めはじめたようです。そして旅人は、内面での心の揺れ動きという充電、歌作という放電を繰り返し、その影響は、少なからず憶良にも飛び火したようです。

793の歌を受けて憶良の作った歌は、インド駢文＋七言絶句の序によって導き出されるところの「日本挽歌一首＋反歌五首」という特異な形式を持ったものであります。

「蓋し聞く、くことなし、と。」という第一段は、あくまで、「聞くところによると」くとのことであるそうだと、という不確かながらそういうことらしいという伝聞推量の口調でこれは、旅人にとっても仏教や外来文化、思想の教養的な知識として持っていたものと思われ、これを書き出しにして、「故に知りぬ、一聖の至極すらに、」とかの二聖すら避けることができなかつたのだから誰も「死」を避けられないと明示し、そして「死」という永遠の時間の所有に對し、「生」の時間のいかに短いことを再認識して「嗟呼痛きかも」と嘆く、そしてその例外にもれず志なかなばにして先に死んでしまった妻へのおもいを導き出し、己の境涯をなげき、「断腸の哀しびい

よいよ痛く」とのべ、妻をあきらめなければならぬとわかっていても、まだあきらめ切れない心情を表出させる。そして最後に七言絶句で、これからの自分の考えをまとめます。

愛河波浪已先滅 愛河の波浪は已先に滅び

苦海煩惱亦無結 苦海の煩惱も亦結ぶ無し

從來厭離此穢土 從來この穢土を厭離す

本願託生彼淨刹 本願は生を彼の淨刹に託せむ

おもいを交流させる相手がなくなってしまったので自己のねがいは、かなうことなくただ空回りするだけである。もともとこの世は、はかないものだと考えていたので、逃れたいと思っていたのですが、それを引きとめていたのは、他ならぬ「妻」という存在であったことにあらためて気付き、自己の「生」を肯定せしめたのは、「妻」あつてのことだったので。しかし妻亡き後の今となつては、さまざまな苦しみ、悩みの満ちたこの世をただけがらわしいものとしてしか考えなくなつたようです。このような文は、憶良が旅人になりかわって作ったものでありますからできたものであります。旅人がこのままもし作ったとしたならば、はばかられるのではないでしょう。か。そのようにこの代作には、それなりに誇張が見受けられることは、否めませんが、基本的、根本的な見方は、外れではないのではないかと私には、思えるのです。この作品は、あくまで代作という形こそとっているのですが、愛・苦海の中の煩惱の完結しえないこの世には、自己の存在価値を見出せない、価しない

ものとし、執着の対象あつてはじめて、自己の「生」を肯定しうるという心情、たとえそれが完結しないものであつてもその可能性に寄せる思いの強さ、そしてそれ以外のこの世は、けがれたうれうべきものであるという見方は、憶良の眼による世の中への基本的姿勢に近いものではないでしょうか。この点にも注意して彼の作品をみていきたいと思ひます。

日本挽歌一首

794大君の 遠の朝廷と しらぬひ 筑紫の国に 泣く子なす 慕
ひ来まして 息だにも いまだ休めず 年月も いまだあらね
ば 心ゆも 思はぬ間に うちなびき 臥やしぬれ 言はむす
べ せむすべ知らに 石木をも 問ひ放け知らず 家ならば
かたちはあらむを 恨しき 妹の命の 我をばも いかによよ
とか には鳥の 二人並び居 語らひし 心背きて 家離りい
ます

漢詩による序に対する「日本」であると思われます題のついた長歌で、妻の死を歌った挽歌であります。さてここにおいての対象であります妻が、旅人の妻で憶良が旅人になりかわって作ったのか、あるいは、憶良の妻の死を彼自身で歌作して旅人に開陳したものは、議論のわかれるところでありますが、ここにおいては、代作ということ、前者の旅人の妻ということ、考え進めていきたいと思ひます。いずれにしても憶良は、旅人の妻の死を十分意識しての歌であつたことは、たしかなようです。

「漢」に対しての「日本」この外見的な違いだけでなく内容的に

もやや趣の異なつたもののようにありまして、序に多く見られました中国の典籍や仏教の成句は、ほとんど使用されず、もっぱら自國語の操作によって表現しようとする努力がみられます。そして述べられている内容も、妻が死に至るまでの経過、背景とそれにつれての作者の嘆きの心境を一息に歌いあげたものであります。一息で歌っているということは、妻の死があまりにも突然であつたことをうかがわせて効果的かもしれないと思ひますが、それだけ内容にも制約があり、歌い切れないものも多いと思ひれます。長歌においては、死んでしまつた経緯と生前の作者の想ひ、そして死後の日常の悲しみの断片を描いたにとどまっているのです。これはなぜでしょうか。長歌という形式で悲しみの叙情をある程度表現することには及第かもしれませんが、その個人の心の中で巨大になつてしまつた全体像をつかむのには、たとえ歌をもつと長くしてもずいぶん効率の悪い、いや不可能な方法ではないかと彼は、感じていたのではないのでしょうか。そして、この歌の作られた時点では、「家ならば かたちはあらむを 恨めしき」とあるのもう家には、妻の遺体がないと思ひますが、また反歌795のの歌の呼応とも考え合わせますに妻の死—殯—葬を過ぎてちやうど旅人が服喪の時に陣中見舞いのような形でつくられたのではないのでしょうか。私は、憶良が風流好みの名士の心中をはかるようになったのはじまりは、まさに旅人の妻の死によつて心をもみくちやにされたこの時、妻というかけがえのない家族の一員を失い残されてしまつたという悲しみに暮れている時に同情というよりも共感といつた方がより近いような形で旅人の胸中を感じようになつたのではないのでしょうか。

ところでここでもう一度ふりかえって、

793世間は 空しきものと 知るときし いよよますます 悲しかりけり

私は、旅人がこの歌を実感しえたのは、妻がこの世を去った直後よりも、憶良のこの後に続く反歌五首の中にこの歌の世界があるように思えてなりません。反歌とは、長歌にそえられて、長歌の内容を別の角度から肯定したり、長歌で言い足りないことを補足したりするもので、通常一首そえられるものなのですが、ここでは五首というボリュームあるものです。これは一体どういうことで何を意味しているのでしょうか。

795家に行きて いかにかがせむ 枕づく つま屋さぶしく 思ほゆべしも

家に帰ってどのように私はしよう。(妻)の枕がある妻屋がさぶしく思われることであろう。

家に帰った時に妻がいないというさみしさ、ぎこちなさを歌にしたもので、内容的には、長歌の「家ならば」、「家をかりいます」というように「家」をふまえた形となっております。この場合の「家」とは、奈良の家か筑紫のものは、判りませんが、どちらかとしてもこの歌は、葬送の帰路という状況設定のように思われます。

796はてきよし かくのみからに 慕ひ来し 妹が心の すべもすべなさ

いとしいことだ。これほどまで私を慕ってついて来た妹の心のなんといいすべなさよ。

生前私を慕ってついてきた妹の心、結果的には、そのことが彼女

の命を縮めることになってしまった。私の今の悲しみは、私を慕ってついてきてしまった妹の心によってさらに強められ、その遠因は、私という存在にあるというなんともやるせないことであるという歌で、これも、長歌の「泣く子なす 慕ひ来まして」をふまえた歌といえます。

797悔しかも かく知らませば あをによし 国内ことごと 見せましものを

悔しいことだ、こうなると知っていたならば国内をくまなく見せておいたものを。

今度は一転して妻の死後の「悔しかも かく知らませば」というように作者の後悔という歌であります。なぜ後悔しているのかと申しますと、人の運命は、わずかな先でさえも知れない、わからないこと、そしてやがては、必ず死にゆく存在であると頭の中ではわかっていたつもりでも、それを十分行動には、いかせなかった自分を嘆いているのです。そしてまた生前の妹が思い出されてくるのです。

798妹が見し 棟の花は 散りぬべし 我が泣く涙 いまだ干なくに

妹が見た棟の花は散ってしまうであろう。私が泣く涙は、まだ乾きはしないのに。

これも長歌の中の「石木をも 問ひ放け知らず」と自然物に対して目を向けたものですがどうしようもありません。生前の妻が見たであろうものを見るにつけ思い出されてしまうという妹なき後の日常生活の中の日々あらたな悲しみの再認識に苦しめられている夫の姿、そして「散りぬべし」と絶望的な想いを表出させるのでありま

した。

799 大野山 霧立ち渡る 我が嘆く おきその風に 霧立ち渡る
大野山に霧がたちこめている。私の嘆きの息吹が風となって霧が
たちわたる。

二句と五句の繰り返しによる古調をおびた歌でありまた反歌五首
の中でこの歌は、他のものと異って直接に妹が表現されておりませ
ん。これ一首だけでは、その嘆きの原因がはっきりしない歌となっ
ております。これは、799の歌だけでは、ひとり立ちしにくい弱々し
いものであるという面もあるようですが、795と798の歌の表現が妹と
密接にかかわっていたのと異なり、799では、悲しみ、嘆きの個人そ
のものが中心にすえられ、その思いが強力に増幅されて自然にまで
作用を及ぼすという作品になっております。実際そうなることにはな
いかもしれませんが、そう信じられていたようなことからなにや
らこの歌は呪術的な感じもいたしますので、二句と五句の繰り返し
もただ単に古調とたたづけられないものがあるようです。これら反
歌五首は、その順序が、はっきりとわかっているわけではありませ
んが、私は、この799がその内容、表現においても、最後にすえられ
てしかるべきものと思えます。

神亀五年七月二十一日 筑前国守山上憶良 上

「上」としてあるのですからこれは、「奉る」という形で自分よ
り目上の者に開陳するという形をとっていることがうかがわれま
す。この場合の相手は、旅人と思われるのですが、これらの歌の中
の「亡き妻」は、憶良の妻か旅人の妻かは、はっきりしておりませ

んでしたが、憶良がもし自分の妻を題材として歌っていたとしても
旅人に開陳するという形をとるからには、旅人の妻のことも十分意
識されていたと考えられます。

これらのことから794と799は、必ずしも代作とはいえないかもしれ
ませんが、憶良がまったく個人的に彼の亡き妻のためだけに作った
ものと言いつれない限りこれは、純粹に代作ではないにしても代作
という一面も持ち合わせた挽歌といえましょう。

さて793に端を發したこれら憶良作の一群は、序十長歌十反歌五首
という特異な構成によって成立しているのですが、特に注目される
のは、反歌が五首もあるということでしたが、和歌一首々は、と
りたててたいしたことのない平凡なものや、それ一首だけでは、一
人立ちしにくいのではと思われるものばかりでした。この五首とい
う数は、もともと長歌一首だけでは、言い足りないことを反歌一首
で補足するのが發展してまだ言い足りないといふに五首にもなって
しまったのではないかと思われれます。その原因は、なんでし
ょうか。それは、反歌の内容に多くみられる残された者の日々の暮らし
の中で妻が思い出されなければならないことが綿々といわれていることか
ら、日常における継続的な悲しみを表現するのには、反歌一首だけ
では、表し切れなかったのだと考えられます。これは、今までの長
歌(A) + 反歌(B) という形でいちおうの完結を終えた形式を打
ち破り超越する形で、(A + n · B) という形式となって、nがた
とえこの場合のように五となってもその五つがそれぞれ短歌同士響
鳴し合い、また長歌とも干渉し合って密接に関係して、言いつくせ
ない所を塗りつぶすように埋め、派生し類型を多く作り、独特の世

界を構築することに成功したといえましょう。先に述べましたように反歌一首々々の平凡さ、弱々しさ、もの足りなさ、そのことによって他の反歌や長歌との結束を強め、一群を一つとして見ることに於いては、強力な一首は、かえってじゃまになったと思えますので、そういった意味では計算されて出てきたようなち密さを感じます。このようにしてできたこれら一群の歌は、言外の言葉を多く持った、すその広い、ふところの深いものになったと言えましょう。大伴旅人の793の序に「筆の言を尽くさぬは、古に今に嘆く所なり」と嘆いたのに呼応するように作られたのではないかと私は、考えます。その尽くせぬ気持を憶良が新しい方法に挑戦して代作という形で成立させたのではないのでしょうか。

さてそれから一年以上もへた天平二年正月一三日、大宰帥大伴旅人がかれの邸宅において開いた梅花の宴にあたって少弐粟田大夫の
817 梅の花 咲きたる園の 青柳は 纏にすべく なりにけらずや
梅の花の咲き匂うこの園の青柳は美しく芽ぶいて、これも纏にできるほどになったではありませんか。という「賀」の歌を受けずに、
818 春されば まづ咲くやどの 梅の花 ひとり。見つつや 春日暮らさむ

春になれば、まっ先に咲くわが庭の梅の花、この花をひとりで見ながら春の長い一日を過ごすのであろうか。

「園」を「やど」に転じて「ひとり」という宴には、ふさわしくないと思われる言葉を用いて、相聞の方法で眼前の梅をほめております。「ひとり」^(注2)とは、通常、妹・背などを伴わないひとりの意味

に使われるもので帥老の宴におけるこの歌は、憶良だけのものではなく、妻を失った旅人の心中をもいたわった歌であるといえないでしょうか。そのような意味でのこの歌もまた純粹には、代作とはいえないかもしれませんがどこかその匂いがします。

しかし旅人にとつての「ひとり」は、もっと深刻だったようで大宰帥大伴卿、大弐丹比県守卿の民部卿に遷任するに贈る歌一首
555 君がため 醸みし待ち酒 安の野に ひとりや飲まむ 友なしにして

あなたのためにと(あなたと飲もうと)用意した酒、しかしあなたは、都に帰ってしまったので私は、ひとり酔う身なのです。という歌であります。歌の修辭的な意味での「友なし(ひとりで)」ではありませんが、實際彼には、多くの部下や友もいたはずで、友は彼一人がすべてではなかったわけでしょうが、私には、この表現がどうも気になります。このような表現は、旅人の他の作品、「大宰帥大伴卿の京に上りし後に、沙弥満誓、卿に贈る歌二首」572・573を受けての

大納言大伴卿の和ふる歌二首
574 ここにありて 筑紫やいずち 白雲の たなびく山の 方にあららし

575 草香江の 入江にあさる 葦鶴の あなたづたづし 友なしにして

満誓がどう受けとったかは、わかりませんが、あまりよろこびは、しなかっただろうと私には感ぜられます。572で「あなたがいないとさびしい」573において「また会いたい」との呼びかけに対して、574

では、ここ（都）から今までいた所筑紫に満誓のいる所はどちらで
しょうか、としているからです。しかし575「入江にあさる 葦鶴
の」とどうもぼっとしない俗っぽく泥くさい表現で「あなたづたづ
し 友なしにして」さみしく不安定な状態をのべているように思わ
れるのです。旅人のなにご不安定なのかと申しますと、精神状態で
はないでしょうか、ここにおいても「友なし」という孤独の表現を
用いております。いくらなんでも都の大納言にほかに一人も友がい
ないはずありませんが、私には、それ以上のものがあるように思
えてなりません。

ひとりではないのにひとりだという表現を555において筑紫から都
へ発信した時の旅人の心中は、望郷の念で作ったのでしょうか。そし
て全く立場の逆転した帰京後、京から筑紫の友人から発せられた歌
を受けてかえすのに「ひとり」という同じ表現を用いた……外観し
たところでは、全く逆の状況に置かれているのにもかかわらず、同
じ表現を用いたということは、彼の精神の内面の状況は、実は、あ
る意味で救済されていなかったのではないかと思えます。555におけ
る寂寥感、575の葦鶴と相通じ合う心の不安定さをあらわしている
ように思います。

距離的・物質的な状況よりも立場において離れてしまった友との
相聞は、微妙に難しいものだったようです。友との別れは、心の安
定を乱します。すべての外的刺激は、旅人の心の平安をおびやかす
にくむべき存在であったはずで、強い精神交流に危機がおとずれ
ると旅人は、相聞の形に「ひとり」という表現を用いて呼びかけた
ようです。ところが決定的なひとりとは、おそらく一番大切な相手

「妻」は、この世を去ってしまいました。もはや呼びかけは、なん
の意味もありません。他に友がいるにもかかわらずその相手には、
「ひとり」・「友なし」とする姿勢は、相手と自分と二人だけとい
う世界を仮定した上での精神交流を行っていたと推測できます。そ
んな彼にとって妻の死は、日常からその相手を奪い取ってしまった
と言ってもよい位に大きな問題であったようでした、そしてその後
も旅人は、この欠如感に悲しみ続けたことがその後の彼の歌からう
かがえます。

さて憶良は、794以下の一群を旅人のことを意識した上で歌を作っ
ていたようですが、時を経て旅人と憶良では意識に相違が出たよう
です。

書殿にて餞酒する日の倭歌四首

876 天飛ぶや 鳥にもがもや 都まで 送りまをして 飛び帰るも
の

877 人もねの うらぶれ居るに 龍田山 み馬近付かば 忘らしな
むか

878 言ひついても 後こそ知らぬ とのしくも さぶしけめやも 君
いまさずして

879 万世に いましたまひて 天の下 奏したまはね 朝廷去らず
して

876において「鳥にもがもや」ともし私が鳥だったらあなたを都ま
でお送りしますものと言っているがこの本意は、憶良自身が都を
せめて一目見たいと思つてのことであるとありますように、877では、旅人

が都に近付けばうれしさのあまり私達の事など忘れてしまわれるでしょうと、どこかいやみを含んだ言いまわしで、878・879で旅人の去った後のさびしさや名残をおしむ形となっておりますが、旅人の行先が他ならぬ都であるため、旅人のいないさみしさよりも自分達との立場の違いにがっかりする程のさみしさと羨しさを感ぜずには、いらなかったことでしょう。これら四首は、列席の一同の気持ちとして憶良が歌ったものでしょうから公的な性質の歌ですが一同の心の底の気持ちもよく表していると思います。しかし憶良は、公の席においても本来ならばはばかられるような事も歌にしました。

敢へて私の懐を布ぶる歌三首

880 天離る 鄙に五年 住まひつつ 都のてぶり 忘らえにけり

881 かくのみや 息づき居らむ あらたまの 来経行く年の 限り

知らずて

882 我が主の み霊賜ひて 春さらば 奈良の都に 召上げたまは

ね

前の四首に対してこれら三首は、「敢へて私の懐」とあるにしても完全に私的な都への帰りたいおもいをむき出しにした歌となってしまう。「都の手ぶり 忘らえにけり」とユーモラスにみえるような導入から「来経行く年の 限り知らずて」いつまでこんなところでため息ばかりついていなければならぬのだろうという不安、そして「奈良の都に 召上げたまはね」どうかあなたのお力で私を呼び寄せて下さい。歌の中心は、憶良の望みだけになり、旅人の心中は無視されてしまっております。ですが旅人にとってほんとうの苦しみは、これからだったのでありまして、帰路も妻の面影ばかり追う

旅人の気持は、憶良には、思い及ばず、ただ都に帰れる立場のみを卑屈なまでに羨しく歌うばかりでした。794と799の歌を作っていないがらこういったことも見抜けなかったところも含めて代作と前提したうえで「表面的な歌」と批評されることもあるようですが、これは^(注3)仕方のないことと私は、思います。代作は、あくまで本人になりかわったの作歌でありまして、本人のことを考えれば表面的なところも残るかもしれませんが、作歌している者にとっては、もっと別の興味のある問題が底流にあったのでは、ないかと私は、思うのです。

このようにしていつしか二人は、お互いに理解できなくなっていたようです。しかし私からみますと大伴旅人・山上憶良、彼ら二人は、お互い刺激し合って老人の歌を作り競いはじめたというどこかライバル同士のような関係にあったのではないかと思えます。しかし結局彼らを待っていたのは、どうしようもない孤独であったようです。このことは、彼らはお互い「親しみ」だけを求めず真剣にそれぞれ個人の心象世界の充足を求めた結果ではないでしょうか。このことは、彼らもたれあったり、なれあったりしない「和して同ぜず」という骨太い関係であったことがうかがわれます。さて、794と799の歌の契機は、旅人の妻の死がその要因のようですが、憶良の他の挽歌を見まして考えられますことは、特に身近な人物・存在でなくとも、場合によっては、見ず知らずの者でも、また身分等もあまりかまわなかったようで、それよりも事件やその状況などを契機として好んだように挽歌の代作をおこなっているようです。旅人の妻の死以外のきっかけでもひょっとしたら夫が妻の死を悲しむ歌の代作をしていたかもしれないと私は、心のどこかで思うの

です。

さていま一つ794と799の歌と似た構成の、確実に憶良の代作といえる歌があります。これは、

大伴君熊凝の歌二首 大典麻田陽春の作

884 国遠き 道の長手を おほほしく 今日や過ぎなむ 言問ひもなく

885 朝露の 消やすき我が身 他国に 過ぎかてぬかも 視の目を欲り

ともに遠い異郷で死ななければならぬ我が身、というように陽春が熊凝の身になりかわって代作したものです。この歌をというよりもこの歌の契機となった事件に目をとめて憶良は、

熊凝のためにその志を述ぶる歌に敬みて和する歌六首

筑前国守山上憶良

という一群を作っております。構成は、漢字文の序に長歌+短歌五首というものです。序は、はじめ「大伴君熊凝は、肥後国益城郡の人なり。」というように熊凝の素姓からはじまり彼の死に至る状況を説明し、そして死に臨んでの最後のおもいとしての794序のように「千聖も已に去り、百賢も留まらず。」というように命に限りのあることをあらためて認識して、それを受け入れようという心づもりであるのですが、なんとも心残りなのは、父母が自分の死を悲しむのがなんともいたわしいとこれもまた794の序のように「哀しきかも我が父、痛きかも我が母。」となげくのでした。そして残したとするのが、

886 うちひさす 宮へ上ると たらちしや 母が手離れ 常知らぬ

国の奥かを 百重山 越えて過ぎ行き いっしかも 都を見む

と 思ひつつ 語らひ居れど 己が身し 労はしければ 玉梓

の 道の隈回到 草手折り 紫取り敷きて 床じもの うち臥

い伏して 思ひつつ 嘆き伏せらく 国にあらば 父取り見ま

し 家にあらば 母取り見まし 世間は かくのみならし 犬

じもの 道にふしてや 命過ぎなむ 一に云ふ「我が世過ぎなむ」

自らの死に至るまでの状況を述べ、そして国の父母をなつかしんで、「世間は かくのみならし」というようにほんとうにやり切れ

ない無念さを表出させます。一方「反歌」としてこそありませんがそう考えられます短歌五首の中では、ひたすら父母のことばかりがうたわれるのです。

887 たらちしの 母が目見ずて おほほしく いづち向きてか

我が別るらむ

意に反して冥界を向かなければならない自分の置かれた境遇、悲しみ、それを受けて、

888 常知らぬ 道の長手を くれくれと いかにか行かむ 糧はな

しに 一に云ふ「千飯はなしに」

と運命を完全に知りえてこんどは、冥土への道中の心配をしておりますが、せめて、

889 家において 母が取り見ば 慰むる 心はあらまし 死なば死

ぬとも 一に云ふ「後は死ぬとも」

と、思いは、父母のいる家に帰りたいのですがどうにも不可能なこと、会いたい父母の心配を

890 出でて行きし 日を数へつつ 今日今日と 我を待たすらむ

父母らほも 一に云ふ「母が哀しさ」

私が旅立った日から指折りかぞえていたのは、他ならぬ私自身なのでしようが、父母もきつと同様にしているであろうとせつなくおもい、「はも」という眼前にはないものを偲ぶ終助詞を用いて表します。親と子のおもいは、共通であるという仮定を成立させる強い一体感があります。

891 一世には 二度見えぬ 父母を 置きてや長く 我が別れなむ
一に云ふ「相別れなむ」

もはや心残り、父母に会いたいことのみとなってしまう。この世へおもしろ残すことは、父母を慕う心一つとなってしまうのであります。ここまでみてまいりまして私感じますのに、熊凝本人の「生」へのあきらめのよさであります。これは、代作ですからそういったところも出てくるのかもしれませんがまたもどってこの一群の題を見直してみますと、「熊凝のためにその志を述ぶる歌に敬みて和する歌六首」となっております。884・885で陽春の歌った「志」は、父母に会いたいというものでありまして、憶良の六首のその中心にすえられている「志」も同様に父母をおもう気持ちであることが憶良の代作を成立させております。これら六首、特に短歌五首には、死者が（まだ死んではいない状況で書かれているのですが）親を思い、心配して心を痛めるといふ一貫したものが感ぜられます。憶良作の熊凝の「志」とは、自分の仕事・任務遂行などではなく、まったく私的、個人的な親をおもう心にそのよりどころがあるのであります。憶良は、「筑前国守山上憶良」と公的な名前の使い方で書いて

おりますので、当時の公用で国を出る人々の、まだ交通機関やそれに付随すべき施設の整っていなかったと思われ、状況で行路に倒れる者は、熊凝一人だけではなかったと思われ、そういった人々の無念さの代弁を熊凝に託したのではないのでしょうか。

そしてもう少し別な角度から見えますと「子が親をおもう」という状況、それも「死際」という極限状況の中で純化されている所にその典型としての作意があったように私には思えてなりません。そしていまひとつ熊凝の序にあった「年十八歳にして」とありますが当時としてはもう立派な大人（今でも本当はそうなのかも知れませんが）なのかも知れませんが、まだあどけなさの残る青年といったイメージのある年齢と感じます。彼に妻や子がいたかどうか、そのことは、序にも歌にも少しも出てまいりません。だからといっていなかっただけ、いい切れませんが、ここでは、問題にしないでさしつかえはないように思います。それよりも一心に両親のことを思う子の姿としては、まことに心打つ姿であったと思います。その実際は、ともかくとして憶良は、親を思う子の姿として目にとめ、それを中心にすえて代作したのではないのでしょうか。

行路に倒れる。これと似たきっかけの歌が巻十六にあります。

筑前国の志賀の白水郎の歌十首

3860 大君の 遣さなくに さかしらに 行きし荒雄ら 沖に袖振る

3861 荒雄らを 来むか来じかと 飯盛りて 門に出で立ち 待てど

来まさず

3862 志賀の山 いたくな伐りそ 荒雄らが よすかの山と 見つつ

偲はむ

3863 荒雄らが 行きにし日より 志賀の海人の 大浦田沼は さぶ

しくもあるか

3864 官こそ さしても遣らぬ さかしらに 行き荒雄ら 波に袖振

る

3865 荒雄らは 妻子の産業をば 思はずる 年の八年を 待てど来

まさず

3866 沖つ鳥 鴨といふ船の 帰り来ば 也良の防人 早く告げこそ

3867 沖つ鳥 鴨といふ船は 也良の崎 回みて漕ぎ来と 聞こえ来

ぬかも

3868 沖行くや 赤らふ船に つと遣らば けだし人見て 開き見む

かも

3869 大舟に 小舟引き添へ 潜くとも 志賀の荒雄に 潜きあはめ

やも

こちらは、海路での遭難という事件を扱ったものですが、歌の後に「右は」ではじまりますところの理書きがありまして、その最後に「く。或は云はく、筑前国守山上憶良臣、妻子の傷に悲嘆し、志を述べてこの歌を作ると」とありますので、はっきりと憶良の代作とは、いえませんものの、憶良のものではないかという可能性があることを示していると思います。当時の人がそのように感じたのですから、それはかなり正しいものと思われませんがこの裏付けは、神亀年中という時、筑前という場所の他に、憶良は、熊凝の歌を作るような人物であったということなどからだけでなく、歌一首くは、それほどとりたてる程でなくとも、3860と3864の第三・四・五句、

3861と3865の結句、3866と3867の第一・二句の類似等、その結束力を強め、

しかも十首という連作に仕立てるといふ構成は、憶良らしさが感ぜられますし、またそれ以上に「妻子」という妻と子をワンセットにしてあつかうのは、特徴あるものと私は、思います。他の憶良作

800 父母を 見れば尊し 妻子見れば めぐし愛し く

892 く我よりも 貧しき人の 父母は 飢え寒ゆらむ 妻子ども

は 乞ひて泣くらむ く 父母は 枕の方に 妻子どもは

足の方に 囲み居て 憂へ吟ひ く

父母を尊ぶというのは、儒教的なものかもしれませんが、妻子は愛するものというのを「く世間は かくぞことわり」と持つて来るあたりは、日本的というよりもかなり憶良的なもの見方のようで、実際彼は、心がけていたことが

山上憶良臣宴を罷る歌一首

337 憶良らは 今は罷らむ 子泣くらむ それその母も 我を待つ

らむそ

私などはもう途中で失礼しよう。今頃子どもが泣いているであろうし、その子の母(すなわち妻)も私を待っているだろうことですから。

などからもうかがえます。そういった意味でこれら十首の憶良的な匂いは、夫と妻子のつながりを基調とした上で成立しているところにあるのではないでしょうか。夫が帰って来ないのを妻子が心配する。その姿を契機に代作する、どこか337の夫が妻子を心配するのと一対となって落ち着く歌のような気もいたします。

さて親と子のつながりにその基調を求めたと思える憶良作の挽歌に「男子名は古日に恋ふる歌」があります。代作かどうかという問題は、老齢に達していた憶良の子にしては、幼な子過ぎるといった単純な考えは別に、憶良の若い頃の実子を失った体験の歌か、それとも幼児を失った知人のために代作したものか、または、生涯を通じて見聞してきた子供を観念化したものであるか、といった様々な見方があるようですが、そのようなことよりも、もし実子のことだと仮定しましてもおそらくかなり古いもう記憶の中の子といったような存在の「古日」がいままで歌にはならず、急にぽっかりと自分が死に近づいていると自覚した頃に浮かび上がってきたのでしょうか、また若い頃でも知人の子供の死はあったでしょうに歌としては残っておりません、そうして生涯を通じて観念化したとかそういうことよりも、老いてなぜ親が子に恋ふる、しかも男親が「男子」を恋ふるということを基調として歌にしたのかが問題ではないかと思えます。

男子名は古日に恋ふる歌三首長一首短二首

904世の人の 貴び願ふ 七種の 宝も我は 何せむに 我が中の
生まれいでたる 白玉の 我が子古日は 明星の 明くる朝は
敷袴の 床の辺去らず 立てれども 居れども ともに戯れ
夕星の 夕になれど いざ寝よと 手をたずさはり 父母も
うへはなさかり さきさくの 中に寝むと 愛しく しが語ら
へば いつしかも 人と成り出でて あしけくも よけくも見
むと 大船の 思ひ頼むに 思はぬに 横しま風の にふふか
に 覆ひ来れば 為むすべの たどきを知らに 白袴の たす

きを懸け まそ鏡 手に取り持ちて 天つ神 仰ぎ乞ひ禱み
国つ神 伏して額つき かからずも かかりも 神のまにまに
と 立ちあざり 我れ祈ひ禱めど しましくも よけくはなし
に やくやくに かたちつくほり 朝な朝な 言ふことやみた
まきはる 命絶えぬれ 立ち躍り 足すり叫び 伏し仰ぎ
胸打ち嘆き 手にもてる 我が子飛ばしい 世間の道

題には、「男子名は古日に恋ふる歌」とありますが内容をみてみますと挽歌でありますのに相聞歌のようなつけかたをしているので、死んでしまった相手を「恋ふる」という題、しかもその相手は、幼ない男の子という万葉集中の異例にもかかわらず「恋ふる」という題詞の表現をあえて使っているということは、他の言い方には、かえがたい、というよりも憶良にとっては、この題をしつくりとあてはまるものと感じとってつけたものと思われまします。このことは、単に死んでしまったわが子がかわいかったとか悲しいといった想いを述べるだけではないなにかを託したのではないでしようか。「恋ふる」ということは、今現在とはともかくとして将来は、完結する可能性のある希望へのあこがれをあらわす表現であると考えられますがその対象は、死んでしまっているものではやそのねがいのかなう可能性は、失なわれてしまっているのですがそれを承知での歌作は、これを超える思い、矛盾を含みながら到りえないものに近付こうとする人間の、姿が浮かびあがってまいります。

歌のはじめでは、「七種の 宝も 吾は何為む」と803の歌のように観念的になっておりますものの、かわいい我が子の細部にわたる描写、それによってコントラストのくっきりとする子の病という暗

部、そして「仰ぎ乞ひ禱み」・「君乞ひ禱めど」と嵐の中にある親の心を表現する憶良の筆力は、すぎまじいものを感じます。歌は・はじめから親ばかりかともれるようなかわいさ、愛しいといった愛情表現で通し、悲しみの表現も、「足すり叫び 伏し仰ぎ」と感情表現で歌を作っております。しかし最後には、「世間の道」と「この世は、こんなものなのかな。」と理解を示そうとしますが、ここでは、恨みの声にも聞こえます。結句に「世間の道」をもってくるのは、「貧窮問答の歌」と同じ使われ方であります。

892 「くかくばかり すべなきものか世間の道」

こんなにも辛くせつないものなのか。世の中を生きていくということとは。

憶良には、世の中を生きていくということとはつらいものだということは、何度も認識されてきたことですが、それは、人間の基本的な願い、人間らしく生きたい、親と子、妻と夫が仲むつまじく暮りたいなどという希望がなんらかのかたちでかなわない、そういった願いがかなうことがないと知った時に、あきらめとも理解とも恨みともいえるような複雑な感情を表現することばとして「世間の道」と言い放ったのだといえましょう。905・906の反歌においては、あきらめにも似た、

905 若ければ 道行き知らじ 賄はせむ 黄泉の使ひ 負ひて通らせ

906 布施置きて 我れは祈ひ禱む あざむかず 直に率行きて 天道知らめ

右の一首は、作者いまだ詳びらかにあらず。ただし裁歌の体、山上の

操に似たるをもちて、この次に載す。

というような静かな調べですが、死んだ我が子のあの世までの道のりを心配する親の愛は、どこまで行っても満足することのない与え続けるものでありこれは、熊凝の一心に両親を心配する心と同じ合うものが見受けられ、黄泉国への道のりをおもうところにも似たものがあります。

さて793〜799の夫が亡き妻をおもう歌、「白水郎」の妻子が夫を待ちこがう歌、「熊凝」の子が両親を心配する歌、「男子名は古日に恋ふる歌の」親が亡き子に恋うる歌、これら一連の挽歌のよりどころは、家族同士の強い愛情の結び付きであることが私には感ぜられませんでした。そしてそれぞれの歌に作歌のきっかけはあったかも知れませんが、その内容は、憶良の解釈で歌の世界を創りあげ、肉親や家族の間でお互いのすこやかな「生」が至上の喜びであるような設定となっていると考えるあたりは、フィクションのような面もあるようです。

晩年憶良は、病に苦しみ、老いが、それに拍車をかけていたことは、「沈痾自哀文」などから十分うかがえますし、彼の「生」へのおもいはやせ細り、しおれていっせ死んだ方がまだとまで思うようになっていたようです。ところが、「老身に病を重ね、経年辛苦し、さらに児等を思ふ歌」の中で憶良は、生きている限りつらい現実が続くのでついには、「死ななと思へど」とまで思いつめておいて「子ども」を媒介にして一転して「生きる」方向に転換しており

ます。ただ苦しいばかりのこの世に自己の「生」の意味を見い出さなかつた彼は、子に対する与え続ける見返りを期待しない愛を注ぎ、そしてその子のすこやかな「生」を手助けするということに喜びを感じる心境に至つたようです。

他人のことをわがことのようにみるという代作、いわばフィクションの世界をひるげることが死が近いと感じられて仕方のない人間憶良の「生」を守る最後の牙城だったのでないでしょうか。そして老齡に達した自分の心情と「生」を肯定する為にこれら挽歌の代作は、存在し、憶良にとってはまさに《食うべき歌》であつたといふことができましよう。

注

(1) 『萬葉集注釋』澤瀉久孝氏らの説による。

(2) 新潮日本古典集成『萬葉集』2 p.63注。

(3) 例えば『私注』の797歌の「作意」に「くそれ程切実とも思はれない。」とあること等。

(4) 『萬葉集歌人と作品下』伊藤博 他。

(5) 萬葉集卷五

900 富人の 家の子等の 着る身無み 腐し棄つらむ 絹綿らはも

901 あらたへの 布衣をだに 着せかてに かくや歎かむ せむすべを無み

というように憶良は、社会の不平等がもたらす子への影響に憤りを感じているような作品を残しております。

参考文献

- | | |
|------------|-------------|
| 『日本古典文学大系』 | 岩波書店 |
| 『日本古典文学全集』 | 小学館 |
| 『万葉集』 | 三省堂 |
| 『萬葉集私注』 | 土屋文明 |
| 『萬葉集注釋』 | 澤瀉久孝 |
| 『火山列島の思想』 | 益田勝実 |
| 『古代人の心情』 | 益田勝実 |
| 東大出版局 | 『講座日本思想I』所収 |
| | (一九八六年卒) |